

世界で激増する4K放送局

文:麻倉怜士 デジタルメディア評論家

毎年、本誌でカンヌのMIPTVにおける4Kの動向をレポートしている。今年ほど、その広がり、コンテンツ作りの進化と深化を実感した年はない。カンヌというと5月に開催されるカンヌ映画祭が有名だが、テレビ番組に関しての世界最大の交換見本市が“MIPTV”だ。毎年、この季節に麻倉怜士氏にはMIPTVにおける4Kの動向をレポートしてもらっている。麻倉氏によれば、その広がり、コンテンツ作りの進化と深化を今年ほど実感した年はないとのことだ。麻倉氏レポートに続いて、テレビ業界ジャーナリストの長谷川朋子氏に番組国際化最前線の動向を寄稿してもらった。(編集部)

4K急成長の秘密

テレビコンテンツの祭典の場を借りて、ここ6年間開催しているのが、ソニー・プロデュースの4Kセミナー「SONY ULTRA HD THATER」(4月8日～11日)だ。世界で4Kコンテンツが集中する場所は本セミナーを置いてほかにない。同時期に開催されるNABも9月のIBCも、またCESもIFAも、ハードやシステムの展示会であり、コンテンツは添えものだ。MIPTVは新コンテンツと新メディアが出会う場だ。

放送衛星オペレーターEutelsatの報告によると、全世界で4K放送局が激増している。世界の4K局(地上、衛星、OTT)の数は2017年10月99局、2018年3月125局、2018年10月149局、そして2019年3月には前年同期比24%増の155局にもなった。もちろん、この中には昨年12月の日本のBS4K局も含まれているが、それにしても、世界でこれほどの勢

いで4Kが伸びているのは驚きだ。まさにカンブリア大爆発の状態だ。

その内訳は衛星69局、OTT93局、地デジ2局(韓国)だ。地域では、ヨーロッパが76局と圧倒的だ。ヨーロッパは国数と言語が多く、個別に対応するため、衛星放送の4K局が多いという。

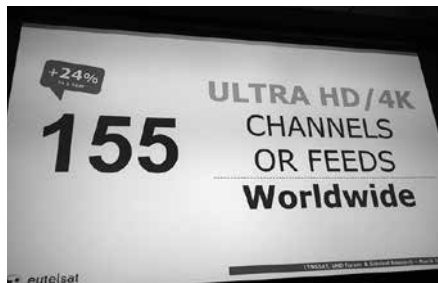
ここまで4K局が多くなると、「4Kはきれい」だけでは差別化にはならない。全局が同じことを訴えるからだ。そこで、「4Kの描写力、訴求力、提案力を番組コンテンツにどのように活用するか」という視点がマストになる。今回のセミナーで4K関係の発表は日本(NHK)、アメリカ、ドイツ、フランス、イタリア、ロシア……など9カ国、11セッション、16コンテンツにも及んだ。なかでも私が注目したのは、まずフィンランドとイギリスの共同制作になる4Kムーミン(原題はMoominvalley、NHK4K放送の邦題は『ムーミン谷のなかまたち』)だ。

制作したフィンランドのGutsy Animations・

CEOのMarika Makaroff氏は「最初にムーミンを4Kでやろうと思った時は周りから反対されました。4Kは製作費がかかることと、せっかく制作しても、フィンランドではプライムタイムにアニメを放映しないからです。でも、イギリス・スカイとの共同制作のおかげで、4Kの素晴らしさが内外に分かってもらえ、世界的に放送が始まったのは大変うれしいことです」。

果たしてアニメに4Kは合うのか。実写と異なり、そもそもディテールがないのだから、4Kの意味はあまりないのではないか。本作のムーミンは素晴らしい。ムーミンの肌の細かなげばだちや、布的な質感が繊細に表現され、立体感も豊穡だ。4Kの新たな活用法として注目した。

美術コンテンツは4Kの定番だが、単に絵画を4K高画質で紹介するにとどまらず、4Kによって美術のおもしろさを深く探究する番組作りが目立った。まず、ドイツは芸術関係の専門チャンネル、ARTE GERMANY。CEO・Wolfgang Bergmann氏はのっけから、「私は



放送衛星オペレーターEutelsatの報告によると、全世界の4K放送局は、2019年3月では前年同期比24%増の155局になった



4Kムーミン(原題はMoominvalley、NHKの邦題は『ムーミン谷のなかまたち』)。フィンランドとイギリスの共同制作



ARTE GERMANYの美術館探求4K番組。ダイナミックなカメラワークだ